

2 0 0 6

40

ワルター・ギーゼキング、レオニード・クロイツァーなどの名匠に師事し、クラシック音楽の真髄を正統に受け継ぐ中山靖子先生。創立者故・福田靖子先生の掲げる「ピアノ学習の裾野を広げたい」という理想に賛同し、以後ピティナと深く関わることとなる。

それから40年の月日の中で、何が変わったのか。そして今後ピティナはどう発展すべきなのか。中山先生の視点から、「ピティナの40年間」を語って頂いた。



福田靖子先生との出会い

「底辺を広げたい」の理想を掲げて

——現在に至るまでの、中山先生とピティナの関わりについてお話し下さい。

今から40年前、東京音楽研究会(ピティナの前身)が、一般公開でセミナーを始められました。その第1回が、福田靖子先生が歌を師事していた木下保先生による「やまとことばをうつくしく」でした。主人(中山梯一先生)が木下先生の門下で、私も伴奏などさせて頂いており、またドイツ帰りでもありましたので、木下先生が福田靖子先生に「今度あの方にセミナーを頼んだらどう?とアドバイスされたようです。

このセミナーシリーズには井口基成先生はじめ、当時の主要な先生方が出演されていました。私には特に時代順に沿ったセミナーをして頂きたいとのことで月に1回バイエルやチェルニー30番、ソナチネなどについての連続セミナーを行うことになりました。でも小さい子どもを扱うのは初めてで「この小さな指をどうしましょうか」と、初めは悩みましたね。

福田先生が仰るには「大学ではきちんとした教育を受けているでしょうけど、一般の町の先生方は、各々それぞれの方向性でご指導なさっているように思うから、東京音楽研究会としては一つの理想を旗印として掲げたい。」とのことでした。



その理想とは「底辺を広げよう」というもの。「底辺」とはレベルが低いということではなく、幅広い年齢層の方を意味し、また先生方も象牙の塔にこもってしまうのではなく、巷の先生方にも同じ思いを伝えていきたい、と考えていらっしやいました。

社団法人化へ 新たなスタートを切ったピティナ

今から20年前、組織を社団法人化する動きが出てまいりました。組織には大学の教授格が必要だと言われ、当時私は東京芸術大学のピアノ科主任教授だったので、ぜひ副会

ピティナ創立40周年を記念して

中山靖子

副会長

美しく正しいクラシック音楽の伝統を継承しながら
ピアノ教育の底辺が広がった40年

▶昭和60年3月、計287名の出席をもって発会式が開かれた。また同年6月には憲政会館にて第1回通常総会・祝賀会が行われた(左写真)。右写真は祝賀会での羽田孜会長(左)、創立者の故・福田靖子前専務理事(右)。



長になってほしいと仰られました。そして諸手続きのため、福田靖子先生と一緒に何回も文部省(当時)に参りました。

やっとの思いで社団法人の許可がおり、お披露目の日を迎えました。なるべく多くの大学の先生方に入って頂きたいとのことで知っている方全員にお電話しました。発会式は憲政記念館で行いましたが、「会場にお越し頂ければ、その場で会員になれます」とご案内したところ、大ホールが人で一杯になりました。そして協会は、「社団法人全日本ピアノ指導者協会」として再出発したのです。

当初は、各地支部のご意見が若い先生を通してこちらの耳に入ってくるので、それを福田先生に伝えるために、1日に2〜3時間電話で話していた時期もありました。私より以前からピティナにいらした先生方の中には、現在もなお活躍されている方がいらっしゃいまして、色々ご苦労もあったかと思いますが、とても良いことだと思います。

参加者数人の時代を経て、花開いたG・特級

私が最初にコンペティション審査に加わったのは、1980年代初頭だったと思います。その頃参加者は、G級が一人二人で、特級はほとんどいませんでした。でも、G級を受ける年代の大学生が、ピティナに振り向いて下さったことが、福田先生としては感動すべきことでした。それをお話になる時、靖子先生が涙ぐんでいたのを覚えています。今は Jr.G 級が新設されたり、特級も参加人数が増えて、さらにそこからヨーロッパ派遣も出て、むしろそこに花開いてきた感がありますね。



「正しく美しいもの」を継承し、発展させていくこと

—20世紀に培われた音楽教育における伝統的な精神を、これからどのように発展継承していけばよいでしょうか。

福田先生が最初に声をかけて下さったのは、日本ではクロイツァーに師事し、またドイツでギーゼキングに師事した唯一の日本人であった、ということだと思います。当時ギーゼキングの奏法は世界中で範とすべきとされていたので、私を通じてそれを信奉していきたいというのが、福田先生の理想でありました。

とにかく楽しい演奏をというのも悪いことではありませんが、それは個人個人に音楽性があればできるでしょう。やはり我々はピアノ指導者の協会ですから、正しい伝統を受け継いでいきたい。私個人もそれに及ばずながら努力しているつもりですが、ピティナでも、グランプリや入賞者の演奏、また審査員の先生方が講評をお書きになる場合も、やはり伝統的な解釈や手法に沿って勉強していることが、評価される傾向であれば良いと思います。

ドイツ留学時代、ある先生が「いつの時代も伝統派と新興派がある」と仰っていました。新興派は個人個人で(傾向が)入れ代わっていくけど、伝統はずっと残っていくし、残していかななくてはなりません。特にピティナのように小さい子供たちを対象とする場合は、指導者である先生方の中に、「美しく正しく」という伝統の精神を持って頂ければと思います。—表現力やメロディ、手の扱い、人格の育て方においても—。それを協会でもよくご理解なさっているのは嬉しいことですし、今後もそうあってほしいと願っています。

(10月4日・中山靖子先生宅にて)

ピティナ創立40周年記念事業 「ピアノコンチェルトの夕べ」

- 日時：2007年3月28日(水) 19:00 開演
- 会場：サントリーホール大ホール
- 出演：須藤梨菜(リスト第1番)・金子一朗(ラヴェル)・関本昌平(ラフマニノフ第3番) 渡邊一正指揮・NHK交響楽団
- 料金(会員・学生券)：S席5,000円/A席4,000円/B席3,000円/P席2,000円
- 問合せ「40周年記念事業」係 E-mail: event@piano.or.jp